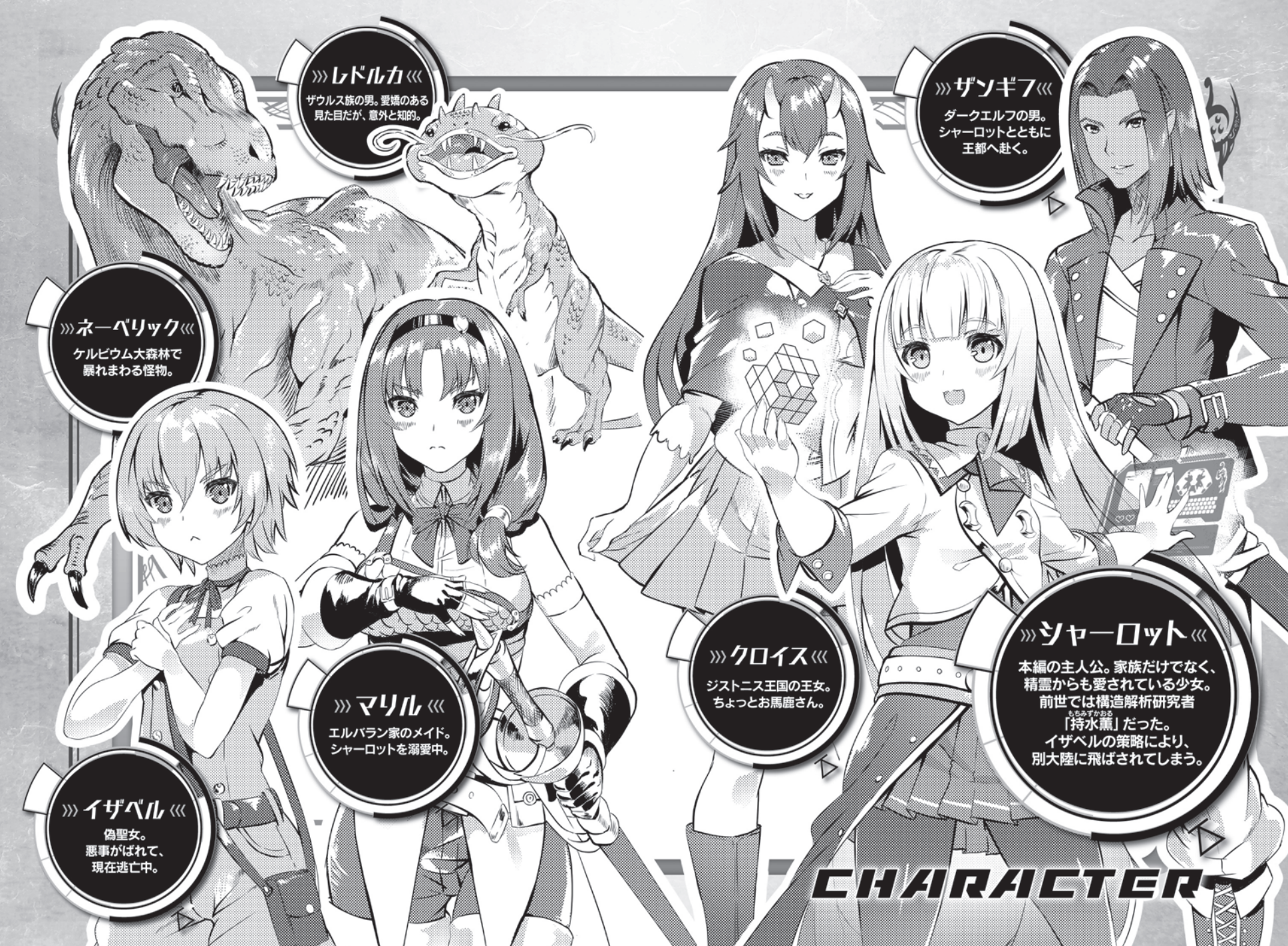
元構造解析研究者の異世界冒険譚 2

ADVENTURES OF A FORMER STRUCTURAL ANALYST

犬社護

INUYA MAMORU


CHARACTER
レドルカ
ザウルス族の男。愛嬌のある見た目だが、意外と知的。
ネーベリック
ケルビウム大森林で暴れまわる怪物。
イザベル
偽聖女。悪事がばれて、現在逃亡中。
マリル
エルバラン家のメイド。シャーロットを溺愛中。
クロイス
ジストニス王国の王女。ちょっとお馬鹿さん。
ザンギフ
ダークエルフの男。シャーロットとともに王都へ赴く。
シャーロット
本編の主人公。家族だけでなく、精霊からも愛されている少女。前世では構造解析研究者「持水薫（もちみずかおる）」だった。イザベルの策略により、別大陸に飛ばされてしまう。

1話　上空一万二千メートルからのスカイダイビング

製薬会社で構造解析研究者だった私――持水薫（もちみずかおる）は、あるとき不慮の事故で命を落としてしまう。でも女神様のはからいで、異世界ガーランドに公爵令嬢『シャーロット・エルバラン』として転生した。『構造解析』と『構造編集』というチートなスキルまでもらって。

そんな私は今、パラシュートなしのスカイダイビング中だった。

もちろん、空なんて飛べない。なす術（すべ）なく落ちている……

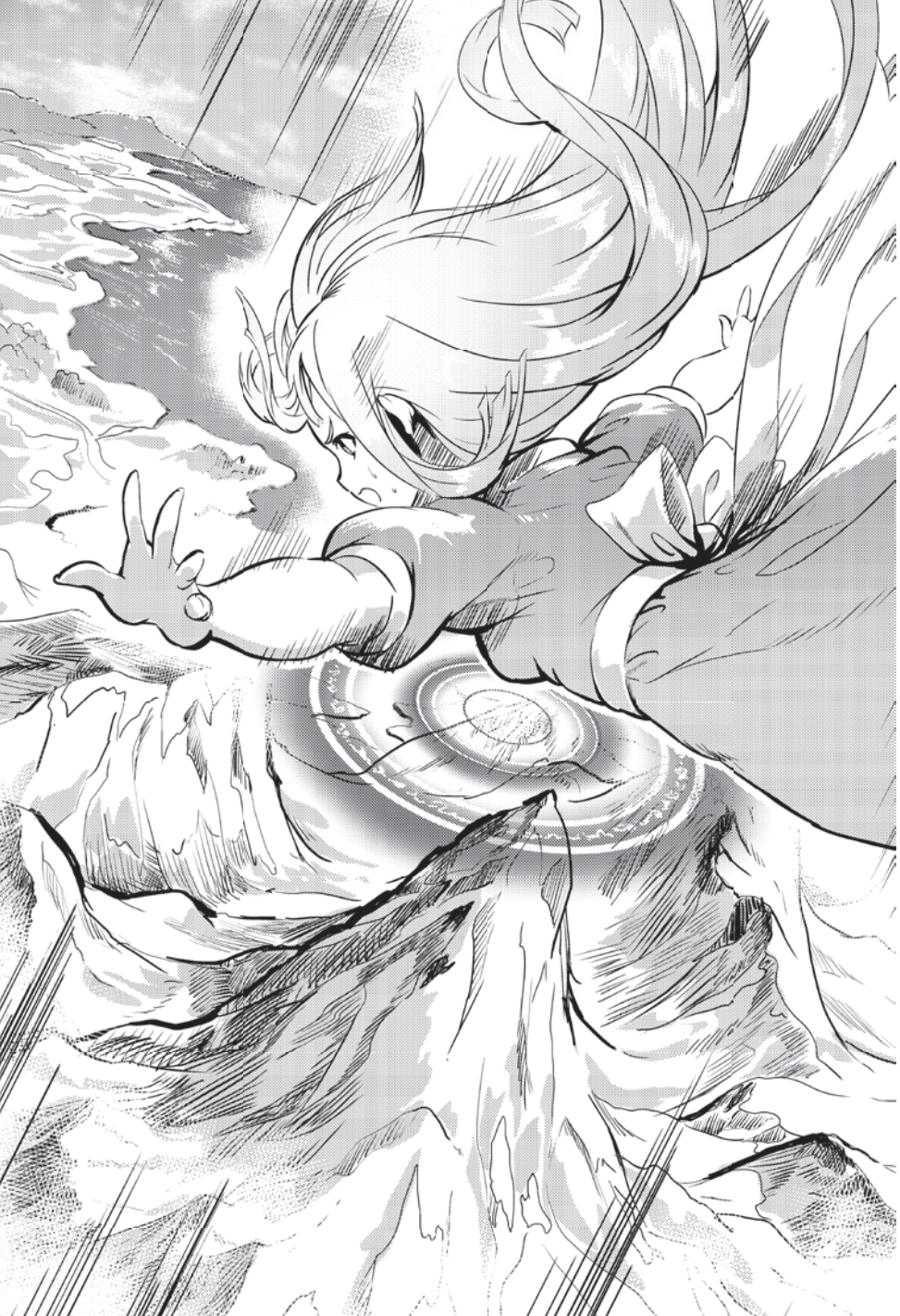
それもこれも、私から『聖女』の称号を奪い、多くの人々に大迷惑をかけたイザベルのせいだ。

逃亡していた彼女を追いつめたとき、彼女が隠し持っていた転移石によって、こうしてハーモニック大陸ジストニス王国のケルビウム山の上空一万二千メートルに飛ばされてしまったのだ。

この世界の神ガーランド様のおかげで、体力と魔力が完全回復し、頭も冴（さ）えているけど、現状をどう乗り越えようか？

ここはアストレカ大陸の正反対に位置しており、時差の関係で周囲が明るい。ただ、下に雲があるせいで、地上が見えない。あの雲を突き抜けた先にあるはずの地上に衝突すれば、私は間違いなく死ぬだろう。

とにかく、まずは空気を確保しないとまずい。息を止められる時間も限られている。



「シャーロット頑張れ～～」
「シャーロットなら生き残れる。頑張るんだ～」
風精霊の方々が目の前で応援してくれている。あの……そんなことしてないで助けてよ！！！
精霊様は、地上にいる生物たちを無闇に助けてはいけないことになっているから、応援してくれるだけありがたいのかな。
ここで魔法を使うなら、まだ持っていない『無詠唱』のスキルが必要となる。ぶっつけ本番で習得するしかない。
ただ、詠唱は魔法を構築するための補助的な役割にすぎない。だから、強くイメージするだけで魔法は発動するし、流れで『無詠唱』も習得できるはずだ。これまで教わった魔法の中で、比較的イメージしやすく、この状況に最適な魔法を使おう。
――イメージイメージ……心の中で強く念じ……ウィンドシールド!!
よし、詠唱なしで声にも出さず、念じるだけでウィンドシールドの発動に成功した!!
ウィンドシールドは、自分の周囲を風で覆うことで身を守る防御魔法だ。
次にすることは、『構造解析』を使用して現在の大気圧と酸素濃度をチェックし、風を利用して地上と同じ設定に調整すれば良い。やり方は簡単。風でシールドの外側から『構造解析』で酸素だけを選択して送り込むだけ。
……やった!! ウィンドシールドのおかげで、少しだけ落下速度が低下した。酸素濃度も、地上とほぼ同じだ。

次は、まだ余裕があるはずだけど、現在の高さも確認しておこう。

《現在の高さは標高八千六百十メートル、ケルビウム山山頂が八千メートルのため、衝突まで残り六百十メートルとなります》

なにいいいいーーーー!!

集中していて下を見ていなかった。周囲は雲に覆われているけど、下降気流が発生したのか、私の真下だけ、地上が見えてる!! やばい、地面がすぐそこまで迫っている。そうか、ケルビウム山上空一万二千メートル、下に見えている地面は山頂か!!

……焦るな。考えろ、考えろ!!

消費MPが低くて、衝撃を和らげる魔法は……あれしかない。ウィンドシールドの外側に出せるようにイメージして……お願い、間に合えー!!

「エアクッション!!」

私は、地上に向けて全力でエアクッション――軽い風の衝撃波――を連続で放った。私の身体が、連続するエアクッションの衝撃で悲鳴をあげている。そして大きな音とともに地上に衝突し、派手にバウンドした瞬間、仰向けとなった。

痛い……痛いよ……タイミングが少し遅かった。あちこち骨が砕けた。嫌だ、死にたくない、死んでたまるか。

「リ、ジェ、ネ、レー、ション」

激痛の中、なんとか回復魔法のリジェネレーションを唱えたところで、私の意識は途絶えた。

「……う、うう」

身体は、なんとか動く。でも、まだ骨が少しおかしい。あれからどのくらい時間が経ったのかな？　リジェネレーションの効果は消えていない。身体のどこがおかしいのか調べずに発動したから、回復速度が遅いのかもしれない。今は余裕がないから、効果が消えるまでじっとしていよう。

真っ暗で何も見えないや。……それにしても寒い。少し動いただけでも、体力を使ってしまう。ここは身体を動かせるまで我慢しよう。考えるのが、億劫になる。何も考えずに横になっていよう。

……一体、どれほどの時間が経過したのかな？　頭がはっきりしてきた。今は深夜二時か、どうりで周囲が真っ暗なわけだ。生き残れたよ。あと少し魔法を放つのが遅れていたら、完全に死んでいたと思う。周囲には誰もいない。今後、私一人で行動し、判断しなくてはいけないのか。

ここはハーモニック大陸の中でも、魔人族が支配するジストニス王国。魔人族は私たち人間とは全く異なる種族、横暴で傲慢……と本に記載されていた。

二百年前まで、人間・獣人・エルフ対魔人族で、戦争したらしい。本では、魔人族が一方的に悪いとされていたし、そう教育されてきた。でも、それは怪しいと思っている。その手の教育には、必ず裏がある。三種族が共闘してまで、魔人族と戦う必要があったのだろうか？

とにかく、魔人族は戦争に負け、大気中の魔素濃度がアストレカ大陸より三倍ほど高く、普通の人間の身体では住みにくい環境となっているハーモニック大陸に追いやられたのだ。

……って、あれ？

ここは、そんな環境の上に標高八千メートル。普通なら高山病にかかったり、寒さで凍死するはずだよね？　いくらリジェネレーションでも、MPポーションもない状態で長時間使用したら、MPが枯渇するはずだ。どうして私は普通に生きているの？　ステータスを確認してみよう。

名前　シャーロット・エルバラン
性別　女／年齢　7歳／出身地　エルディア王国
レベル3／HP3／MP18／攻撃10／防御9／敏捷9／器用660／知力792
魔法適性　全属性／魔法攻撃76／魔法防御67／魔力量102
回復魔法：イムノブースト・ヒール・ハイヒール・リジェネレーション
火魔法：ファイヤーボール
水魔法：アイスボール
風魔法：ウィンドシールド・エアクッション
ノーマルスキル：鑑定　Lv10／気配遮断　Lv10／魔力感知　Lv9／魔力操作　Lv9／魔力循環　Lv8／自己犠牲　Lv8／隠蔽　Lv5／状態異常耐性　Lv3／HP自動回復　Lv2／MP自動回復　Lv2
ユニークスキル：全言語理解・精霊視・構造解析・構造編集・環境適応・無詠唱
称号：癒しっ子

HP3！　リジェネレーションを使って、かなりの時間が経過しているはずだけど、ほとんど回復していない。それに、MPの残量が18もある。エアクッションの連発と、リジェネレーションの使用を考えると、0になってもおかしくないはずなのに。どういうこと？

魔力量も少し上がってるし、ノーマルスキルに『自己犠牲』と『気配遮断』と『状態異常耐性』と『HP自動回復』と『MP自動回復』が追加されてる。HPとMPが0にならないのは、これらの自動回復スキルとリジェネレーションのおかげか。それに、『環境適応』って何？　そういえば、ガーランド様がユニークスキルを一つ与えたって言ってたよね。えーと詳細は……

環境適応
どんな環境下でも、身体が適応し生存可能となる

うん、嬉しいんだけど、身体が進化するってことだよね？　嫌な予感がするな～。まあ、せっかくもらったんだし、ありがたく使わせてもらおう。残りのスキル……う、また気分が悪くなってきた。HP3しかないのに、考えすぎたかな？　仕方ない、完全回復してから残りのスキルをチェックしよう。また、眠く……なって……きた。

……時刻は朝九時、視界は『真っ暗闇』から『薄暗い闇』に変化し、数メートルほどだけど周囲

が見えるようになった。でも、太陽光が山頂に届いている感じがほとんどしない。おそらく、この山頂は、魔素濃度が高すぎるせいで、光をほとんど遮断してしまうんだ。身体もまだ動かせないけど、時折降る雨が唯一の救いかな。

リジェネレーションの光が消えない。それに、精霊様の姿が見えない。ここは魔素濃度が凄く高いから、入ってこられないのかもしれない。周りからは、魔物の気配や魔力も感じられない。おかしい、静かすぎる。これも魔素濃度が原因なの？　今なら、『構造解析』を使えるかもしれない。

「大気……構……造……解……析」

はあはあ、少し声を出しただけでこれだ。どれだけ酷い環境なんだ。

ケルビウム山山頂の大気

魔素濃度：約60％　酸素濃度：約20％　窒素濃度：約20％　気圧：地上の約1／3　気温：マイナス60度

千年前に勃発した魔人族・獣人と人間・エルフ・ドワーフとの大戦争において、魔素爆弾が現在のジストニス王国内で使用され、周囲一帯は誰も住めない環境となった。現在は魔人族の尽力により、周囲の魔素を山頂に集約させることで、人が住める環境となっている。この山頂に踏み込んだ者は、精神錯乱などのあらゆる状態異常にかかる。一呼吸しただけで、大量の魔素が体内に侵入し身体を脅かす。三呼吸しただけで、魔素が細胞を食い破り、全ての生物が息絶える。

なんて極悪な環境なんだ。リジェネレーションが消えないはずだ。今、私の身体は、『環境適応』とリジェネレーションで生き延びているんだ。だから、ＨＰもほとんど回復していないんだ。

時間をかければ、スキルによって身体が完全にこの環境に適応できるように変わるはず。絶対、適応してやる。死んでたまるか!!　必ずエルディア王国に帰るんだ!!

２話　サバイバル生活の始まり

墜落してからどのくらいの時間が経過したのだろうか？　薄暗い視界だけど、不思議と周囲に何があるのか認識できるようになった。例えるなら、暗視カメラで見ているようだ。多分スキルの『暗視』を取得したのだろう。

《身体が完全にこの環境に適応しました。ステータスを更新します》

やった!!　ついに、私の身体が、この極悪環境に適応したんだ!!

《人間族のステータス限界２５０を超えました》

《魔人族のステータス限界５００を超えました》

《ステータスシステム９９９の限界を超えました。ステータスが９９９以上となったため、正確な数値を算出できません。自分で検討してください》

うん？　今、何かとんでもない内容を聞いたような気が？　あ、リジェネレーションの光が消え

た！　全ての感覚が急速に蘇ってきた。

よし！　起き上がって手足を動かしてみる。うんうん、きちんと思う通りに動く、問題ないね。身体が環境適応したということは、姿も変化しているのかな？　ポシェットの中に、鏡があったはず……うん、当然割れてるよね。割れてる破片の中でも、大きいやつなら辛うじてわかるかな？

ほっ……薄暗いけど、きちんと姿がわかる。瞳、髪、皮膚の色も、環境適応前と同じだ。そうなると、変化したのはステータスの数値だけになるのかな？

名前　シャーロット・エルバラン
種族　人間？／性別　女／年齢　7歳／出身地　エルディア王国
レベル3／HP40／MP999／攻撃0／防御999／敏捷999／器用660／知力850
魔法適性　全属性／魔法攻撃0／魔法防御999／魔力量999
回復魔法：イムノブースト・ヒール・ハイヒール・リジェネレーション
火魔法：ファイヤーボール
水魔法：アイスボール
風魔法：ウィンドシールド・エアクッション
ノーマルスキル：魔力感知　Lv10／魔力操作　Lv10／魔力循環　Lv10／鑑定　Lv10／気配遮断　Lv10／隠蔽　Lv10／暗視　Lv10／HP自動回復　Lv10／MP自動回復　Lv10／自己犠牲　Lv10／気配察知　Lv6／聴力拡大　Lv4

ユニークスキル：全言語理解・精霊視・構造解析・構造編集・環境適応・無詠唱・状態異常無効
称号：癒しマスター

『人間？』って何？　ガーランド様、ふざけてるの？

人間？
通常ではありえない環境で生き残り進化した新型の人間。寿命は、普通の人間と同じ80～100年ほど。ただし、中身は人間や魔人族よりも大きく変化していて、二十代前半で身体的成長がストップし、寿命が尽きるまで、その姿を維持する

あ～なるほど、だから『人間？』なのか。確かに、こんな特殊環境下で生き残れる人間はいないよね。極悪環境に適応しちゃったから、種族もこうなったわけか。寿命は普通の人間と同じで、身体的成長が二十代前半でストップか。まあ、病気の一種と思えばいいか。地球の女性から見ると羨ましがられるかもだけど、いざ自分がなってみると複雑な気分だ。

新しく覚えたスキルのほとんどが、全部レベル10になってる。一体どれだけの日数をかけて、ここまでに至ったのだろうか？　ほとんど何も考えず、魔物に襲われないよう気配を殺していたからわからない。多分、寝てるときも無意識のうちに、スキルを行使していたのかな。ところで、この『自己犠牲』って何かな？　少し前に解析したときにもあったけど、詳細を見てなかった。

自己犠牲

所持者の生命が危機に陥ったときにのみ、自動で発動するスキル。ステータスの数値を犠牲に、生命維持に足りない箇所を補ってくれる

なるほど、私の生命維持には、このスキルも関与していたんだ。そう言えば、はじめに確認したとき、知力が少し減っていた気がする。今後は、ＭＰを犠牲に発動させれば、強さが減少することはないよね。

それと、『聴力拡大』は今後も役立つから、どんどんレベルを上げていこう。

あと、ステータスの攻撃と魔法攻撃以外の数値がとんでもないことになっている。ステータスシステムの限界値を突破したせいで正確な数字はわからないけど、攻撃力が皆無になった代わりに防御、敏捷、魔法防御、魔力量が世界最強になってしまった。自分に『構造解析』をかけてみよう。こうなった原因を正確に知っておかないとね。

シャーロット・エルバラン

偽りの聖女に逆恨みされ、ケルビウム山山頂に転移させられた。山頂の環境は世界最悪なため死ぬ寸前となる。だが、ノーマルスキル『自己犠牲』、ユニークスキル『環境適応』と魔法『リジェネレーション』のおかげで、攻撃力と魔法攻撃力が皆無になった代わりに、強力な物理・魔法攻撃に耐えうる強靭な身体へと変化した

強力な物理・魔法攻撃……か。全てとは記載されていない。そうなると、今の私に対してもダメージを与えられる生物がいるんだ。９９９を超えたからといって、油断しない方がいい。

うっ……完全に目覚めたおかげか、お腹が異常に減ってきた。何日ご飯を食べていないんだろう。とりあえず、食べ物を探そう。しばらく歩いてわかったんだけど、ここは標高八千メートル、気圧も気温も低い厳しい環境にもかかわらず、息が苦しくないし、寒くもない。自分の身体が、この環境に適応したのが嫌でもわかる。凍傷とかもないから、『状態異常無効』も効いているのかな。

それにしても、薄暗い山頂には見事に何もない。『暗視』のおかげで、周りがだだっ広い平地であることがわかる。

何もないのは山頂だけで、少し下ると森になり、下れば下るほど、明るくなっている。どうやら、薄暗いのは山頂部分だけのようだ。ちょうど、ここからでも見える森との境目、あそこから光は遮断されることなく、地上に届いている。ただ、あそこから環境が変化しているせいか、魔物の気配も感じる。それに、かなり遠いけど人の気配も感じる。『魔力感知』や『気配察知』のおかげで、魔物と人の気配も明確に区別できるね。

人の気配がした周辺を見渡すと、かなり遠いのでわかりにくいが、村らしきものが見えた。とりあえず、目標はあそこに到達することかな。ただ、このまま行動に移しても、すぐ死ぬよね。いくら防御が世界最強になっても、餓死することだってありえる。現に、今は物凄く空腹だ。まずは、

食糧を確保しないと。森だから木の実とかあるはずだ。
いったん山頂に戻り、山全体の気配を探ると、北の方向に凄く大きな魔力を感じた。この魔力量、私と比較すると、半分くらいだけど、おそらく戦うことになったらダメージを受けると思う。その周辺にいる魔物たちが怯えているのもわかる。いきなりそんな超強力な魔物と戦いたくないので、北以外で食べ物を探そう。
――そして、森への入口に到着した。現状、魔物とあまり戦いたくないけど、空腹には勝てない。とりあえずこの辺を探してみよう。
……うーん、結構探したのに、実っている果実が二種類しかなかった。
一つは、マンゴーくらいの大きさと形で、色はホワイト。実の表面に厳ついブルドッグのような顔があって、『あん、俺を食う気か？　はっ、食えるもんなら食ってみろや』と挑発されている気分になる。
なんか嫌な予感がしたので、構造解析してみた。

ガウガウの実
ケルビウム大森林に生息する厳ついフォレストウルフの顔が表面にある。この顔には、見た者を怒らせ引きつける特殊な魅了の効果がある。実自体は適度の甘さと柔らかさで、非常に美味しい。ただし、一度でも魅了に囚われた状態で食べてしまうと、病みつきになり、ガウガウの実だけを欲するようになる。そして、食べれば食べるほど、無気力となっていく。やがて、自分自身もガウガウの実を生やす木になってしまう

こんな危険なもの、食えるか!!　ガウガウの実じゃなくて、魅了の実の間違いだろ!!
もう一つの実は、どうかな？　形も色もガウガウと同じなんだけど、表面の顔が子犬で『お願いだよ、僕を食べないで』と切実に訴えてくる。この顔を見たら、非常に食べづらい。

ウルウルの実
一個で、一日は何も食さなくても良いとされる栄養豊富な実。ＨＰとＭＰを２００回復させる効果を持つ。表面には、子供のフォレストウルフが描かれており、視線を合わせると、僕を食べないでという感情が切実に伝わってくる。この魅了効果に惑わされずに食べることをお勧めする
※現在のシャーロットは十日間何も食していないので、この実を三個食べることを推奨する

なるほど、ガウガウもウルウルにも、天然の魅了魔法が施されているのか。一方が猛毒で、もう一方が食用。ケルビウム大森林に住む人や魔物たちは、これを見極めて食しているんだね。食べづらいけど、ウルウルの実を実食しよう。
モグモグと実を食べると、徐々に味が口の中に広がってきた。美味い!!　味もマンゴーに近いよ!!　それじゃあ解析通り、三個食べよう。今後はこれが主食となるのか。太りたくないから、毎日『構造解析』でチェックした方が良いね。

――よし、三個食べて、お腹もいっぱいとなったところで、今後のことを考えよう。
・力を百パーセント制御できるようにする。
・防御力の強化。物理と魔法攻撃を無力化させる方法を考える。
・自分の攻撃力に頼らないなんらかの攻撃手段を考える。
こんなところか。急激に強くなってしまった自分の力を制御することが、第一だね。そして、なんらかの攻撃手段を見つけて完全にマスターしてから、この森を突破しよう。

○○○

山頂で訓練を開始してから二日、体内の魔力を循環させたり、目に魔力を集中させたり、周りの気配を窺ったりしたことで、自分の感覚がどんどん研ぎ澄まされていった。『視力拡大』を習得したし、他のスキルもレベルが上がった。でも急激に強くなったためか、身体がステータスの数値に追いついている気がしない。あと攻撃魔法に関しては、やっぱりだめだった。
訓練当初、試しにファイヤーボールやアイスボールを放ったけど、火はライター程度の大きさ、氷はコップに入れるサイズだった。色々と工夫してはみたものの全く成果なしということで、自分の攻撃魔法は完全に役に立たないことがわかった。
攻撃魔法が使えないとなると、相手の体内にある魔力を利用するしかない。確か地球には外気功というものがあった。あれを応用する。私は考えに考え抜いて、相手の体内にある魔素自体を破壊する技を編み出した。この世界のあらゆるものに魔素が宿っているので、なんにでも効くはず。
それが、スキル『内部破壊』だ。このスキルを編み出すのに、本当に苦労したよ。
――『構造解析』で敵の最も弱いところを解析し、そこに自分の魔力をそっと流し、相手の魔力を狂わせ破壊する。
このイメージ通りにいくか、近くにあった大岩で試してみたが……全くの無傷だった。何度も何度も検証した結果、この魔力による破壊も攻撃認定されるとわかった。だったら、『魔法操作』で相手の魔力をかき乱し破壊する案を思いつき、試しにやったら爆散し、成功。『内部破壊』を取得したのだ。まだまだ弱いから、これをどんどん強化していかないとね。

○○○

訓練を開始してから、五日が経過した。

ノーマルスキル：魔力感知　Lv10／魔力操作　Lv10／魔力循環　Lv10／鑑定　Lv10／気配遮断　Lv10／隠蔽　Lv10／暗視　Lv10／HP自動回復　Lv10／MP自動回復　Lv10／自己犠牲　Lv10／気配察知　Lv8／聴力拡大　Lv7／視力拡大　Lv5／内部破壊　Lv5／威圧　Lv5

『気配察知』がレベル8、『聴力拡大』がレベル7、『視力拡大』と『内部破壊』がレベル5にまで

到達した。『環境適応』があるせいか、レベルの上がり方も早い気がする。
そして『内部破壊』という攻撃手段、必ず相手に触れなければならないという大きな欠点もあるけど、かなり有効な手段だ。
また、新しくスキル『威圧』も覚えた。ただ、このスキルの扱いには注意が必要だ。威圧量＝《使用する魔力量》×《『威圧』のスキルレベル》という計算式で成り立っており、相手の威圧量を上回っていれば、威圧が成立し、相手を恐慌状態にすることができる。しかし、あまりに差があり過ぎると、恐慌を通り越してショック死する危険性もあるのだ。実際、魔力量の制御を間違えて、遠くにいたコボルトナイト一体を討伐してしまった。人に向けるときは要注意だね。
でも、ずっと訓練したおかげで、かなり制御できるようになった。森の探索でも役立ちそうだ。
それに、強力な魔物と遭遇したときの必勝パターンも考えた。
『威圧→構造解析→構造編集→ステータスの数値を改ざん→弱点部分を内部破壊』
この流れだ。たとえ相手のＨＰやＭＰが９９９あっても、『構造編集』で１００にまで落とせる。これはステータス全てにおいて可能だ。『威圧』や『内部破壊』が通用しなくても、『構造解析』と『構造編集』の連続で相手の弱体化が可能となるから、まず生き抜けるだろう。
訓練と並行して着手したのが、物理・魔法攻撃無力化の魔法作成だ。一口に物理攻撃といっても様々な種類がある。それらの攻撃で生じる運動エネルギーを無力化するには、どうすればいいのか。ここで思いついたのが闇属性だ。
とあるＲＰＧの魔王や邪神は闇の衣を身にまとうことで、物理攻撃や魔法を緩和していた。そこで私も、物理攻撃の運動エネルギーや魔法そのものを闇属性の衣に吸収させるというイメージを強く強く思い、闇属性の魔力を全力で圧縮させ、一つの不可視の衣を作製した。
そうしてでき上がったのが、ユニークスキル『ダークコーティング』だ。なぜか闇魔法ではなく、ユニークスキルになってしまった。

ダークコーティング
闇属性の魔力を極限まで圧縮し身にまとうことで、物理・魔法攻撃が闇に吸収される。ただし、自分の魔力値を超える攻撃が放たれるとダメージを受けてしまう

これじゃあ、完全に魔王だ。いや、攻撃力０なら魔王とは言えないかな？
それはそうと、この五日間の食事は、全てウルウルの実だ。慣れって怖いよね。今じゃ、普通に食べてるよ。これで全ての準備が整った。
そうそう、あれからステータスを再度確認すると、称号の『癒しっ子』が『癒しマスター』になってることに気づいた。なぜ進化したのだろうと思って詳細を見れば……

称号　癒しマスター
癒しっ子の上位版。周囲の者のストレスを大幅に減少させる効果を持ち、スキル所持者に触れた者は、どんな状態であろうとも、状態異常の一つ『精神錯乱』が解消される

『癒しっ子』が『状態異常無効』の影響を受け、『癒しマスター』になったのか。これは、ありがたい効果だ。

五日間山頂で訓練したおかげで、身体の制御方法もわかった。あとは森に入って、スキルを鍛えていこう。特に『内部破壊』は、生きている凶悪な魔物たちで試していかないと、これ以上レベルも上がらないと思う。

さあ、明日からは、いよいよ森の攻略だ。

3話　初めての友達

全ての準備が整ったのは良いけど、服装だけは変えようがない。学会のために新調したお気に入りの服が、衝突時の衝撃や訓練もあって、ところどころ破れている。できれば、魔人族の村で冒険者用の服を貰おう。さて下山して、あの森を突き抜けよう。それじゃあ出発!!

……この森、魔素濃度が山頂よりも大幅に低い。それでもエルディア王国に比べると、三倍くらいかな。普通の人間なら絶対に死んでるはずだけど、私には全く影響がない。

それに、一時間以上歩いているのに息切れ一つしないし、魔物と遭遇しても、戦おうと少し魔力を出しただけで相手が逃げるし、私の身体がどんどん魔王化している気がする。戦闘になっても、

魔力を一切外に出さないように戦わなきゃ。

はあ……この憂鬱な気分から脱却するため、走ってストレスを解消しよう。

おー速い速い。敏捷９９９だけあって、すごく速い。まだまだ速く走れそうだ。どんどん山を下っていくと、不意に何かが飛び出してきた。

車は、急に止まれなーーーーい!!

――ドーーーーーン!!

盛大に衝突してしまった。私は問題ないけど、相手は瀕死だった。

ナマズのような顔、両サイドにある二本の口髭、全身青色の硬そうな皮膚に覆われた、全長二メートルほどの恐竜に見える。この子、凄くユニークな顔をしているね。

可哀想だから回復してあげよう。

「ハイヒール」

「……!?」

あ、気づいたようだ。こっちを見て威嚇している。まずは構造解析してみよう。

名前　レドルカ

種族　ザウルス族／性別　男／年齢　58歳／出身地　ケルビウム大森林

レベル38／ＨＰ３６７／ＭＰ２２１／攻撃３８５／防御２０８／敏捷２２１／器用１７１／知力

204

魔法適性　雷・光・空間／魔法攻撃198／魔法防御178／魔力量221

回復魔法：ヒール

雷魔法：ライトニング・ライトニングボルト・ライトニングストーム

空間魔法：テレパス

ノーマルスキル：ライトニングファング　Lv9／気配遮断　Lv9／魔力感知　Lv8／魔力操作Lv8／魔力循環　Lv8／聴力拡大　Lv8／気配察知　Lv7／身体強化　Lv7／危機察知　Lv7／威圧　Lv5／短縮詠唱　Lv5／洗濯　Lv3

ケルビウム大森林において、強さ（強S・A・B・C・D・E・F弱）はBランクに位置している。ザウルス族の指揮を担当しており、仲間たちからも認められている。ただ、気弱な性格のせいで、やや挙動不審なところがある。定期巡回のため、ザウルス族の縄張り周辺をパトロールしていたところ、山頂から一陣の風が吹いてきたので確認しようとしたら、シャーロットと衝突した

このステータスでBランクか。Sランクは各ステータスが500以上だと聞いたことがある。この子は攻撃力特化のBランクってところか。威嚇（いかく）しているということは、格上だと気づいてないのかな？　『気配遮断』を使っているから無理もないけど。

種族のザウルス族って魔人族とどう違うのだろうか？　『ザウルス族』の箇所をタップと。

ザウルス族

ハーモニック大陸にいる固有種。遥（はる）か遠くに存在する地球という惑星に、かつて住んでいた恐竜たちの子孫。神ガーランドが地球の管理者たちと協力して、この惑星に移動させた。当初は魔物扱いされていたが、現在は魔素のおかげもあって、知能がかなり進化しており、魔人語も話せることから魔物ではなく、ザウルス族と認知されるようになった

ここで地球という言葉が出てくるとは思わなかった。絶滅する前に、こっちに移動してたんだ。魔物じゃないのなら話し合いはできるよね？　『威圧』はまだ制御が不完全だから、代わりに魔力をほんの少しだけ解放してみよう。『全言語理解』があるので、言葉は問題なく伝わると思う。

「あなた、私の声が聞こえる？」

あれ？　話しかけた瞬間、後退りした。

「やめて、食べないでください。お願いします。どうか食べないでください」

よし、伝わった!!　でも、この怯（おび）えようは本気で怖がっている。

「一瞬感じた魔力で、勝てないことがわかりました。なんでもしますから食べないでください」

正体不明で、魔力も異常に高いから怖がるのはわかるけど、私を見たら人間ってわかるよね？

「あの落ち着いて。あなたを食べる気ないからね」

「本当ですか⁉」

「食べる気なら、こんな風に話しかけたりしないよ」

私の言葉に納得したのか、この子はジロジロと見てきた。悪者なのか、観察しているのかな？
「……よかった、匂いや気配を探ったけど、悪い人間じゃなさそうだ。その……さっきはごめんね。気が動転しちゃって、ネーベリックのように僕たちを食べるんじゃないかと思ったんだ」
ネーベリック？
「君、どうしてこんなところにいるの？　もしかして、主人から捨てられたの？」
ネーベリックという言葉が気になるけど、先に質問に答えよう。
「違うよ。簡単に話すと、アストレカ大陸にあるエルディア王国にいたんだけど、そこの偽聖女に逆恨みされて、転移石でここに飛ばされたの。あと、魔人語を完全に理解できるのは、スキルのおかげね」
「略しすぎだよ！　一応、大まかには理解できたけどさ。……まあ、こんな場所で嘘を言うとは思えないし、君もなんか複雑な人生を送っているね」
恐竜にツッコまれるとは思わなかった。あれだけの説明でも理解してくれたんだ。何気に賢い。
「私は、シャーロット・エルバラン」
「僕はレドルカ。ねえ……もしかして山頂から来たの？」
そうか、山頂で訓練していたから、その魔力で周辺にいる人の方も気づいているんだ。
「そうだけど、それがどうかしたの？」
「じゃあ、あの強大な魔力の正体は君なのかい？」
やっぱり尋ねてくるよね。ここは正直に答えよう。

「うん、何かまずかった？」
「あのさ、この一週間で時折感じた巨大魔力がなんなのか、僕たちの救世主となりえるのか、森に住む種族たち全員が調査しているんだ」
救世主？　この森に何か危機が迫っているの？
「あなたたちが私に危害を加えないのなら、味方になる……かな？」
「ホント!?　絶対に危害を加えない、約束する!!　だから、僕たちの天敵ネーベリックを倒して欲しい!!」
下山途中で、いきなりイベントが発生したよ。私としても、まず仲間が欲しい。そのネーベリックというやつを倒せば、森に住む種族は、私の味方になってくれるかな？
「ちょっと待って。まずは落ち着こう。順に話してもらわないと意味がわからないよ」
とはいえ、ネーベリックが何者なのか全くわからない。まずは、情報収集だ。
「あ、ごめん。救世主が現れたと思ったから、テンションが上がっちゃった。ネーベリックはタイラントレックス型のザウルス族なんだけど、他の仲間よりも大きくて凶暴なんだ」
タイラントレックスって、ティラノサウルスのことだよね？
「その凶暴なネーベリックが、この森のボスなの？」
「いや、ボスじゃないよ。あいつは、僕たちの敵さ。今、ネーベリックのせいで、ケルビウム大森林の全種族が絶滅の危機に瀕しているんだ。二十日前、ザウルス族、ダークエルフ族、獣猿族の三種族だけで、協同でネーベリックに戦いを挑んだけど、敗北して十人くらいが食べられた」

ネーベリックは、大昔の肉食恐竜みたいだね。
「レドルカ、タイラントレックス型って言ってたけど、その名前、誰が決めたの？」
「名前？　確か……ヴェロキのお母さんが言ってたよ。あいつはタイラントレックス、別名ティラノサウルスだって。あいつは凶暴だから、連携して戦わないといけないって、僕たちに連携方法を教えてくれたんだ」
……ヴェロキって、まさかヴェロキラプトル？　きっとヴェロキのお母さんは、自分たちがヴェロキラプトルだから、子供にヴェロキって名づけたんだ。ティラノサウルスの件と言い、ヴェロキのお母さんは地球の知識を持っている。きっと転生者なんだろう。
「ヴェロキのお母さんは、今も健在なの？」
「……ううん、もう一人の子供、プードルの身代わりになって食べられた」
プードル⁉
「差し障りがなければ、そのお母さんの子供の名前を教えて」
「別に良いけど。三人いて、ヴェロキとラプトルとプードルだよ」
ぐはっ‼　やばい、噴き出して笑いそうになってしまった。不謹慎すぎる。いや、転生者ということは、きっとガーランド様のフォローが入るはずだから、そんなに深刻な気持ちになれないっていうのもあるんだけど……
「どうしたの？　震えてるけど大丈夫？」
レドルカがうつむいている私を心配して、顔を覗き込んできた。まずい、我慢しないと。

「……くく……いや……大丈夫……可哀想だと思って…ね」
ヴェロキのお母さん、そのネーミングは安直すぎる。ヴェロキラプトルだから、ヴェロキとラプトル、あと思いつかないからプードルにしたんだ。
「シャーロット、泣いてくれて、ありがとう。種族が違うのに、そこまで思ってくれるなんて」
笑いを我慢したから、涙が出たとは言えない。誤解されたままにしておこう。
あと、ヴェロキのお母さんのことは、機会があればガーランド様に聞いてみなきゃね。
「それで、現在はどうなってるの？」
「二十日前の戦いで、みんな大怪我を負ったから、それぞれ次の戦いに向けて回復中だよ。ネーベリックは強い魔物と戦うために、ケルビウム大森林の北側に移動した」
ケルビウム大森林の北側？　山頂での訓練中、時折感じていた強大な魔力、あれがネーベリックだったのか。ネーベリックの強さは、ステータスの数値だと６００～８００ぐらいだ。他の人たちも、レドルカと同等の強さだとしたら、普通のやり方では絶対に勝てない。
「大体、事情がわかった。村で傷を癒し、力を溜めているときに、山頂から巨大な魔力を感じて、その正体を探ろうとしていたんだね？」
「そうだよ。多分、ネーベリックも勘づいて、近日中にこっちに戻ってくると思う。シャーロット、改めてお願いするね。どうか、ケルビウム大森林の救世主になってくれませんか？」
レドルカのお願いを無視して森を抜けることも可能だけど、ここまで事情を知ったからには、ヴェロキのお母さんのためにも、協力するしかない。

「私で良ければ協力するよ」
「ホント!! やったーーーー」
「喜んでいるところ悪いけど、私は実戦経験ゼロだから、みんなの協力がいるけど大丈夫？」
初の実戦が、いきなり世界最強クラスの化け物とはね。
「もちろん!! いくら魔力量がネーベリックを超えていても、子供一人に戦わせないよ。みんなに紹介したいから、僕たちザウルス族の村に来てくれない？」
よかった、協力してくれる。一人では、ティラノサウルスと戦いたくないよ。ただ、どうしてかな？ それほど、怖さを感じないんだよね。
「いいよ。まずは、私の力を認識してもらわないとね」
ザウルス族はどんな家に住んでいるのかな？ ていうか、恐竜が家を建設できるのだろうか？

○○○

ザウルス族の村は、ここから少し離れているという。歩いていくと、少し時間がかかるらしいから、今のうちにネーベリックや魔人族について聞いておこう。
「ケルビウム大森林にいる全種族が一致団結して、ネーベリックと戦ったことはあるの？」
「一年前に対戦したよ。結果はこちらが壊滅だった。あいつはみんなを食べることで、どんどん強くなっていった。二十日前の戦いでも大敗して、もう誰が挑んでも太刀打ちできないんだ。でも、シャーロットが参加してくれれば、ネーベリックに勝てる可能性が出てくる」
食べると強くなるか。特殊なスキルを持っているのかもしれない。レドルカの味方となる以上、私の攻撃手段を教えておこう。
「私の攻撃方法は、かなり特殊でね、相手に触れないといけないの。当然、ネーベリックも、得体の知れない女の子を自分の間合いには入れないと思う」
「相手に触れないといけないの？ 武器とかは？」
「必要ない。私の魔力は、ネーベリックよりも上だから、やつに接触できれば、『内部破壊』という特殊なスキルで倒せると思う」
「『内部破壊』？ 聞いたことないスキルだ。倒せる可能性があるのなら、それに賭けるよ」
会って間もない私の話をすぐに信用するとは……相当追い詰められている。ネーベリックを倒す手段はあるけど、ザウルス族たちと連携して近づく方法を考えないといけない。
「レドルカ、ネーベリックとは別に気になることがあるんだけど、私たち人間はハーモニック大陸にいる種族を総称して、『魔人族』と呼んでいるんだけど、どのくらいの種族がいるの？」
「ハーモニック大陸には、魔鬼族、ダークエルフ族、鳥人族、獣猿族、ザウルス族がいる。魔人族と総称しているのも、きちんした理由があるんだ。僕たちザウルス族が語り継いでいる歴史なんだけど、遥か昔の大戦争で、この大陸一帯の環境が激変して、魔素濃度が人間族のいるアストレカ大陸やランダルキア大陸よりも高くなってしまった。そのため一時期、この大陸に住む全種族が絶滅の危機に陥ったんだけど、少しずつみんながこの魔素の環境に適応しはじめた。そして、数十年の

歳月が過ぎる頃には、普通に生活できるようになった。そこで『魔素に打ち勝った偉大な人々』ということで、全員を『魔人族』と呼ぶようになったのさ」

えー、初耳なんだけど!?　こっちでは、魔の心に囚われた悪鬼と語り継がれてきたよ!!

「魔人族って、そんな偉大な意味があったんだ。全然、知らなかった」

「シャーロットは、どう聞いていたの？」

言ったら怒るんじゃないかな？

「詳しいことは知らないけど……魔人族は、魔の心に支配された種族のことで、性格は残忍、傲慢、野蛮、と最悪だから、仮に出会ったとしても近づいてはいけないと教わったよ。二百年前の戦争も、魔人族がアストレカ大陸を支配しようとして引き起こしたものの、戦争に負けて、ハーモニック大陸に逃げていって……」

「うっわ、なにそれ、どこの種族の話？　こっちの歴史と全然違うよ。僕たちザウルス族は、森を出ないから詳しく知らないけど、さっきも言った通り、魔人族は遥か昔からこの大陸に住んでいるよ。それに、魔人族がアストレカ大陸に攻めていったんじゃなくて、人間やエルフたちがハーモニック大陸に攻めてきて、大敗して逃げ帰ったの」

完全に逆じゃん。こういうときは、相手のことを悪く言う方が嘘をついているもの。大方、『種族としてのプライドが許さない』というしょうもない理由で、人間側が歴史を改竄したんだ。大陸間が離れているから、真実を知ることもできない。それと、ランダルキア大陸の国々はその戦争を傍観するだけで、何もしなかったと教わった。おそらく、両大陸からの有益な資源を失いたくない

から、完全中立を維持したんだ。

「そういうことか……教えてくれてありがとうね。この森には、全種族がいるの？」

「昔はみんながケルビウム大森林に住んでいたんだけど、人口が増加したことで、各種族の多くが出ていって、あちこちに国を作ったよ。といっても、森には少ないけど今も全種族がいて、ネーベリックと戦っているんだ」

当初、環境に適応した人たちは、この森に住んでいたんだ。ここが魔人族発祥の地なんだね。

「あ、村が見えてきた。シャーロットをみんなに紹介するね。さあ、行こう」

ザウルス族の村か。ネーベリックを倒すためにも、まずは恐竜たちとお友達になろう。

4話　ザウルス族の村

ザウルス族の村に着いた。けれど、ここは拓けた場所というわけではなく、他のところよりも木々の間隔が広いくらい。家は一軒もない。あるのは、直径四メートルくらいの鳥の巣のようなベッドだけ。それが、あちこちに点在している。

そして、肝心のザウルス族は……ここから見える範囲だと、全長二メートルくらいのヴェロキラプトル、全長二メートル五十センチくらいのデイノニクス、全長一メートルくらいのコンプソグナトゥス、全長五十センチくらいのミクロラプトル、全長一メートル～一メートル五十センチくらい

の様々な恐竜の特徴が混じった雑種など――二足歩行の小型恐竜ばかりだった。
「ねえレドルカ、もっと大きなザウルス族はいないの？」
「そんなのは、ネーベリックだけ。遥か昔には、大小様々なザウルスたちがいたらしいけど、まず敏捷性の低い四足歩行のザウルスたちが、魔物の獲物となって大小問わず死んでいった。次に、二足歩行の巨大なザウルス……だったかな？」
　レドルカって、千年以上前の歴史も知ってるんだ。
「二足歩行の大型ザウルスは、なんで死んだの？　敏捷性もあるし強いでしょ？」
「ドラゴンに食べられたんだ。巨大なドラゴンからすれば、僕らも人間と大差ないからね。大きい分目立つし」
　納得。ドラゴンは小型でも全長八メートルと本にあった。中型以上に空から襲われれば、ひとたまりもない。自然淘汰の末に、敏捷性があって小型なザウルス族たちだけが生き残ってきたわけか。
「それなら、ネーベリックだけどうして大きいの？」
「そこがわからないんだ。ネーベリックの全長は十メートル。そもそもやつは、この森には住んでいなかった。五年前、ジストニス王国の王都方面からやって来たのさ。多分、王都に行けば、何かわかると思うけど、今は戦力を減らしたくないから、偵察にも行けないんだよ」
　これは、何か事情があるね。あ、一頭のヴェロキラプトルが近づいてきた。
「レドルカ、偵察ご苦労さん。そんで、そこの人間はなに？」
　結構迫力あるな。深緑に覆われた硬い皮膚、前足の先にある鋭利でカーブした鉤爪、筋骨隆々の

後足、ある一点を除いて、映画で観たCGのヴェロキラプトルだ。そのある一点とは目だ。映画では鋭い目で、獲物を睨みつけるけど、このザウルスからは鋭さを感じられない。どこか、温和そうな雰囲気を感じる。他のザウルスも同じ感じだ。
「ヴェロキ、この子が山頂の巨大魔力の正体だよ」
　ああ、この人がヴェロキさんなんだね。
「……冗談でも笑えないぞ」
「見た目だけは、普通の子供だからね。シャーロット、『威圧』使える？」
「スキルはあるけど、まだ加減できないよ？」
「あ、それはダメだ。下手すると僕もヴェロキも死んじゃう。僕と会ったときみたいに、魔力を十秒ほど外に出してくれない？『威圧』とは違うけど、魔力の大きさや質は伝わるんだ」
　レドルカと出会ったときの対処は、あれで合っていたのか。
「でも、いいの？　あのときのレドルカのようになるよ？」
「『威圧』よりマシさ」
　仕方ない、ヴェロキさんには悪いけど、信用してもらうためにも少し魔力を解放しよう――
「……」
　あ、ヴェロキさんが目を大きく見開いたまま固まった。後方にいる他のザウルス族たちも固まってしまった。これで私の魔力量が、ネーベリックよりも大きいということが証明されたかな。
「ヴェロキさん、私はシャーロットと言います。レドルカから、ネーベリックの話を聞きました。

私は、あなたたちの味方です。敵意を見せない限り、私からは何もしません」
「本当に、俺たちの味方？　ネーベリックと戦ってくれるのか？」
「はい。ただ、実戦経験がないので、あなたたちの協力が必要となります。私がネーベリックの頭部に触れることができれば、倒すことは可能です。そうですね……そこの古びた鎧や剣で、私の攻撃方法をお見せしましょう」
すぐ近くにあった大岩に、古びた鎧や剣が置かれている。サイズが違うから、他の種族の戦死者が使っていたものだろう。まずは、鎧を構造解析する。材質は鋼鉄、金属にも微量の魔素が含まれているため、全ての魔素を瞬時に暴れさせ……一気に外に押し出す!!
パアアァァァーーーーン！
大きな音とともに、鋼鉄製の鎧が粉々になった。
「凄い。『内部破壊』って、本当に内部から破壊されるんだ。これ、僕たちにもできるかな？」
「そこは、よくわからない。対象に含まれる魔力や魔素の位置を正確に把握して、それを自分の『魔力操作』で暴走させるの。少なくとも『魔力操作』を極めていないとできないと思う」
ああ、全員から吐息が漏れた。
「でもよ、なんらかの方法でネーベリックの動きを止めることができれば、シャーロットのそのスキルで勝てるんだよな？」
「ヴェロキさんの言う通りです。この攻撃は相手の防御やスキルを無視するから、誰にでも通用します」

その瞬間、周囲がざわめき、歓声へと変わった。他のザウルス族も、レドルカ同様、私の気配と匂いから人柄を判断して、信用できると思ったのだろう。みんなが涙を流し、戦意が漲ってきているのがわかる。
「レドルカ、ザウルス族は何人いるの？」
「全部で二百人くらいかな？　ただ……その中でもやつと戦えるのは三十人くらいしかいない。というか、今この場にいる連中のことだね。他のみんなは……あまり言いたくないけど、手や足を失ったせいで戦力にならないんだ」
二百人!!　一つの種族が二百人しかいないって絶滅寸前じゃないか!!　そうなると、まずは全員を回復させる必要がある。今の私なら、リジェネレーションの範囲もかなり広いはずだ。周囲五百メートル以内に設定して、みんなを回復させよう。
「レドルカ、私は回復魔法のリジェネレーションを使えるの。今から全員を完治させるね」
「え、あの上級魔法を使えるの!?」
「うん。しばらくの間、動かないようにと、怪我してる人たちに伝えて欲しい」
「わかった。みんな、シャーロットの話を聞いたよね？　急いで、全員に通達して!!」
ザウルス族たちが一斉に動き出した。北の方向から感じるネーベリックの気配は、まだ動きを見せていない。やつがこっちに来る前に、全ての準備を整えておこう。

○○○

現在、リジェネレーション使用中のため、私は動くことができない。魔物が接近した場合は、私の『威圧』で排除すればいい。怪我の酷い者たちだけ、構造解析を行って治療速度を速めている。

私は隣にいるレドルカやヴェロキさんから、現在のザウルス族の最大戦力となる者が誰なのか、特殊攻撃をできる者はいないかなど、色々と聞いてみた。

しかし、ネーベリックは『状態異常耐性』を持っている上に、最大攻撃力４２３を持つデイノニクスのデイドラさんでも、全く歯が立たないらしい。彼も私のすぐそばにいるので、色々と聞いてみよう。

デイノニクスのデイドラさん、薄い茶色の毛と濃い茶色の毛が縞模様となって、身体全体を覆っている。頭の上にトサカのような棘が数多くあるのが特徴的だ。彼は、レドルカやヴェロキさんと違って、雰囲気がどこか大人っぽい。

「デイドラさん、あなたの最大攻撃でも、ネーベリックは無傷だったんですか？」

「悔しいが、全くの無傷だ。あの硬さは異常だ。しかも、ヴェロキたち三兄妹の連携攻撃さえ軽々と回避する敏捷性もある。やつの力はSランク、数値で言うなら６００以上はある。おまけに、『身体強化』のレベルも高いから手に負えない」

『身体強化』？　私は、まだ持ってない。

「私は『身体強化』を持っていません。習得方法を教えてくれませんか？」

「なに、それはまずい。このスキルは、基本ステータスの数値を底上げしてくれる便利なものだ。

リジェネレーション中だが、『魔力循環』と『魔力操作』を使用できるか？」

「もう慣れてきましたから、そのくらいなら大丈夫です」

「よし、血液に流れている魔力を、身体全体にある筋肉の中に染み込ませるんだ」

ふむふむ、身体の中にある魔力を効率的に活用するんだね。そうなると、筋肉ではなく、細胞に染み込ませるようにしよう。ただ、細胞が潰れないように、少しずつだ。

《身体強化Lv5を取得しました》

……呆気なく取得してしまった。しかもレベル5だ。

「ありがとうございます。『身体強化』レベル5を習得できました」

「「な!?」」

あれ？　なんかまずかった？

「シャーロット、習得するのが早すぎるよ!!　デイドラが喋って、数分しか経過してないよ!!　普通は、最低でも一日くらいかかるんだよ」

ええ、そうなの!?

「筋肉に染み込ませても不完全だと思って、細胞に染み込ませたんだけど？」

「「細胞？」」

「簡単に言うと、身体の臓器とかを構成しているものだね。細胞が集まって組織になり、組織が集まって臓器になるの。三人も筋肉ではなく、もっと深いところをイメージして魔力を染み込ませたら、スキルレベルが上がると思うよ」

「身体を構成するものか。レドルカ、ヴェロキ、やってみよう」
三人が瞑想した。三人のスキルレベルは、どこまで上がるかな？
「僕の『身体強化』が7から8に上がった!!」
「レドルカ、俺も同じだ。あとで、ラプトルとプードルにも教えないと」
「私は、7から9に上がった。こんな簡単に上がっていいのか？」
多分、デイドラさんのイメージが上手いんだ。あと、これまでの経験もあると思う。早速、『身体強化』を構造解析だ。

身体強化

体内にある魔力を身体の組織に染み込ませることで、身体全体が強化される。また、染み込ませた魔力に属性を付与させれば、強化率もさらに上昇し、扱い次第では弱者でも強者を打ち破ることができる

おお、凄いぞ『身体強化』!!　私は身につけたばかりだから、属性付与は危険だよね。ここは、経験豊富な人にやってもらおう。
「レドルカ、染み込ませた魔力に雷属性を付与して、私に見せて」
「「は!?」」
あれ？　何か、おかしいこと言ったかな？

「え……そんなことができるの？」
これは……ひょっとしてみんな知らない？　うーん、ここは『構造解析』のことを話した方がいいかな。でもな～って……よく考えたらこの時点ですでに化け物扱いされてるよね。今更、ユニークスキルのことがバレても、あまり変わらない気がする。『構造解析』だけなら、『鑑定』の最上位に位置するスキルって言い方で納得してくれるかもしれない。
「できるよ。私には、『鑑定』の最上位版である『構造解析』を持っていて、あらゆるものを嘘偽りなく解析できるの。『身体強化』を調べたら、強化中の魔力に属性を付与すれば、強化率も上昇するんだって」
「「『構造解析』!?　身体強化中の魔力に属性付与!?」」
三人とも、大口を開けている。本当に知らなかったんだ。
「と、とにかく、やってみるよ」
レドルカが目を閉じ、集中した。数分ほどすると、身体から薄ら黄色く光り出し、バチバチと音が鳴りはじめた。
「……できたよ。力が溢れてくる」
「お、俺もやるぞ！　風属性を付与だ」
「私は、火属性を試してみる」
三人とも凄い。すぐに、強化中の身体に属性付与を行った。はじめは、身体から属性の光が漏れていたけど、十分ほどで感覚が掴めたのか、光が収まってきた。

「この感覚……もしかしたら……やった!!　シャーロット、デイドラ、ヴェロキ、見てみて！　僕の牙に『身体強化』を集中させたんだ。牙から凄い魔力を感じる!!」
レドルカ、本当に凄いよ。牙から感じる魔力は、ネーベリックを超えている。
「すげえ～、それなら俺の鉤爪にもできるか？　……やったぜ、成功だ!!」
「私もできた。だが、この属性付与は、身体の消耗も激しい。常時の使用は無理そうだが、切り札としてなら使用できる。シャーロット、感謝する!!　ネーベリックはこのことを知らない。我々にも勝ち目が出てきた。みんなに……」
「待って待って!!　今はリジェネレーション中だからだめ。まずは回復に専念しよう」
『身体強化』と属性付与を完璧に使いこなせれば、ネーベリックとの戦いで、有利に事が運べる。あとは、どうやって戦うかだ。みんなのステータスを解析して、戦法を考えよう。

5話　対決前の下準備

リジェネレーション完了後、私は多くの恐竜たちから、感謝の抱擁や握手を求められ、ちょっとした騒ぎとなった。落ち着いたところで、私からも、ここに来た経緯をみんなに説明し、目的はアストレカ大陸エルディア王国にある実家に戻ることだと、しっかり伝えておいた。ザウルス族全員が私の話を信じてくれたことで、私は村内へ温かく迎え入れられ、彼らの仲間として認められた。

ハーモニック大陸に転移されて初めてできた友達が恐竜とは、想像もしてなかったね。
そして、今は夕食中だ。
ザウルス族は家を持たない。村と言われているけど、そこを縄張りにしているだけだった。本来なら家族ごと別々に食べるそうだけど、今回は私という強力な味方を手に入れ、全員の怪我が完治したということで、士気を高めるためにも、全員が集まって食事することになった。
こういうときって、通常族長からの挨拶があるらしいけど、前の戦いで死んでしまったらしい。そこで、私を見つけたレドルカが族長代理となって、挨拶を行い、夕食会が開催された。
メニューは、ウルウルの実や魔物肉、森に自生している野菜などだ。私も食べようと思ったけど……問題が発生した。魔物肉が生なのだ。ザウルス族は魔物肉を生のまま食べるのだろう。せっかく私のために用意してくれたのに、「生の肉は食べられません」とは言えない。
「シャーロット、どうしたの？　今日の肉はフロストビーだから、甘くて美味しいわよ。フロストビーは、森に咲く花から蜜を吸って、体内の器官に溜め込む習性があってね。肉にも、蜜の匂いや味が染み込むのよ。私たちにとっては、ご馳走なの」
今、話してくれたのは、ヴェロキラプトル三兄妹の長女――プードルさんだ。夕食ができるまで、三兄妹と色々話した。長男のヴェロキさんは、明るくて良いザウルスだけど、お調子者なのがたまに瑕かな。次男のラプトルさんは、やや気弱なところがありつつも、ヴェロキさんと同じくお調子者だった。そんな二人を制御しているのが、しっかり者の長女プードルさんだった。
「えーと、人間は肉を焼いて食べるのが主流なの。その方が、肉の旨味が増して数段美味しくなる

んだ。ほら、こんな感じだよ」
試しに、私とプードルさんのフロストビーの肉をファイヤーボールで焼いた。私の肉はミディアム、プードルさんの肉はレアだ。いきなり、きちんと焼いたものだと食べづらいだろうからね。
「そういえば、他の種族たちも焼いていたわね。私たちは、基本生で食べるから気にしてなかったけど、試しに食べてみるのもありかな」
肉の色が少し変化したせいか、プードルさんがおそるおそる匂いを嗅いでいる。
「へえ〜、確かに香ばしい匂いがするわ。試しに……なに……これ……見た目は生に見えるけど、味が全然違う。香ばしくて、甘くて……肉が溶ける……物凄く美味しい!! ただ焼くだけで、ここまで変化するものなの!?」
「変化しちゃうんだな。生だと、少し臭みがあるでしょ？ 人間はそれを打ち消すために、肉を焼いてタレに漬けてから食べるの。他の種族から聞いてなかったの？」
「聞いてはいたけど、ザウルス族の古くからのしきたりで、『肉は生で食すのが良し』と言われていたのよ。だから、生の方が美味しいと思い込んでいたわ。シャーロット、焼いた肉は、私たちに合わないのかしら？ もう食べちゃったけど、毒ってことはないわよね？」
うーん、一応『構造解析』で調べて見よう。
「――『構造解析』で調べたけど、全然問題なしだって。むしろ、なんで焼かないのか不思議だと記載されてた」
「う……そ」

そこからが、ちょっとした騒ぎになった。プードルさんが、レドルカたちに知らせたのだ。全員が揃って、火魔法でフロストビーの肉を焼いていった。焼き方に関しては、私がレア、ミディアム、ウェルダンと教えたけど、やっぱりザウルスによって好みが別れた。ただ、総合的に見ると、レアが好まれるようだ。あまり焼き過ぎると、蜜の匂いが消えてしまうのだ。みんな、笑顔でフロストビーの肉をほおばり、楽しいひと時を過ごせた。

翌日、私はレドルカとデイドラさんとヴェロキラプトル三兄妹を呼び出し、ネーベリックについて話し合った。まずはレドルカにネーベリックの全体像を地面に描いてもらったら、やっぱりティラノサウルスだった。そうなると、急所は頭部で間違いない。でも、高さ十メートルもあるから、簡単に触らせてくれるはずがない。それなら、アキレス腱を攻撃し、歩行不可能にすれば良い。ネーベリックもその部分だけは、他の皮膚よりも薄いはずだ。そこに一撃必殺の攻撃を浴びせれば、地面に倒せるだろう。
ここで重要になるのが、誰が私と一緒にネーベリックと戦うかだ。とりあえず全員に『身体強化』からの属性付与を追加させる方法をレドルカたちと協力して教えたけど、多人数よりも少数精鋭で挑んだ方が、成功率も高いと思う。
現在のネーベリックは、北に潜む強力な魔物たちを食べて、さらに強力になっているはずだから、ステータスの防御の数値を８００と仮定し、アキレス腱を確実に破壊できるザウルス族を厳選しないといけない。それができるのは、雑種のレドルカ、デイノニクスのデイドラさん、ヴェロキラプ

トル三兄妹の五人しかいなかった。
ただ、私の策を確実に成功させるには、このままではダメだ。そこで、彼らが共通して持っている『跳躍』に注目し、ネーベリック討伐方法を五人に話した。
「――僕たちにそんなことできるのかな？　今までに試したザウルスはいないよ？」
「レドルカ、自信を持って!!　『跳躍』があって、周囲の木々を利用すれば、絶対にできる!!　成功すると、『跳躍』の進化型スキルも習得できる。五人には、これから『身体強化』と属性付与、『跳躍』の練習をしてもらうね。他のみんなは、『身体強化』と属性付与を完璧に使いこなして、防御に専念してもらう予定だよ」
もちろん、私も『身体強化』と属性付与の練習を行わないといけない。
「私は、シャーロットの戦略に賛成だ。ネーベリックに少しでもダメージを与えられるのは私たちしかいない。やつは強くなっていることもあって、我々が少数精鋭で挑んだら油断するはずだ。そのときのやつは、『身体強化』も疎かにしていて、防御が最も薄いだろう。だがこの油断は、戦いの序盤でしか起こらない。その間に、アキレス腱を食い破らないといけない」
デイドラさんの言う通りだ。私たちは戦いの序盤で、致命的な一撃を与えないといけない。
「……そうだね、やるしかない。ここで負ければ、ザウルス族は絶滅するかもしれないんだ。みんな、頑張ろう!!」
おそらく、やつは山頂の異変と、南から感じる私の気配で、数日中に戻ってくるだろう。戦いに備えるべく、この日から特訓が始まった――

○○○

特訓を開始してから二日後、狂気を孕んだ禍々しい気配が、ザウルス族の村に近づきつつあった。
「レドルカ、やつは今日中にこの村に到着するぞ」
「シャーロットの気配が、村に留まっていることを察知したのかな？」
「おそらくな」
デイドラさんとレドルカは、比較的落ち着いている。でも、ヴェロキラプトル三兄妹はかなり緊張していた。
「三人とも、身体が固いよ。大丈夫？」
「特訓で『立体舞踏』を習得して、身体への属性付与も可能になったけど、正直怖いな。ラプトルはどうだ？」
「兄貴と同じ気分だ。シャーロット、成功率はどのくらいだ？」
「正直に言うと、今の時点で五十パーセントくらいかな」
五人は連日の訓練で、『立体舞踏』のレベルを6にまで引き上げていた。他のみんなも、私たちとネーベリックの戦いが森林を破壊する危険性もあるため、防御魔法の訓練に専念してもらったことで、新たな魔法を覚えられた。やるべきことは、しっかりやった。
「ヴェロキもラプトルも、もっと自信を持ちなさい!!　みんなも褒めてたでしょう？　ここから先

立ち読みサンプル
はここまで

は、ぶっつけ本番で試すしかない。お父さんとお母さんの仇を討つためにも、しゃんとして!!」
「……そうだったな。父さんと母さんの仇を討つんだ。シャーロットのおかげで、不思議と今までにないくらい、力は溢れてる。やろうぜ、ラプトル、プードル」
三人は、互いを見つめ頷きあった。ヴェロキさんは、自分の両手を見つめ、自分の中の魔力を確認したのかな？　たった二日の訓練ではあるけど、私が構造解析しながら、五人の長所と短所を見極め、重点的に教えたからね。
「ネーベリックの気配が止まりましたね。む、やつの近くに知らない気配が三つほどあります」
「位置的に、獣猿族のパトロール隊とぶつかったか!?　レドルカ、どうする？」
「デイドラ、助けに行こう。獣猿族も、たった三人でネーベリックと戦うことはしないはずだ。ここから距離も近い。みんな、ネーベリックとの戦いを始めるよ!!　僕たち六人が戦うから、みんなは周囲を取り囲んで、防御に専念するんだ。出発だ!!」
目的地は、ここから北西二キロほどの地点。私が一人で走っていけば、確実に助けられるけど、今は団体行動中、勝手な行動は余計危険だ。獣猿族を信じるしかない。戦いに挑むメンバーは、私たち六人。周囲の森を防御魔法で強化させるメンバーが二十人、残りのメンバーは村で待機だ。
獣猿族の三人の気配はかなり弱々しいけど、私たちの気配に気づいたようだ。こちらに向かってきている。そして、ある地点から地響きがした。ズウウウウウーーーン、ズウウウウウーーーンと、その地響きが、少しずつ大きくなってきている。
「みんな、僕たちから離れて!!　戦いが始まったら、周囲を大きく囲んで防御魔法を展開するんだ」
全員が頷き、散開した。やつの目的は私だから、まず目移りすることはない。
前方から獣猿族三人が私たちのところに飛び込んできた。レドルカから聞いてはいたけど、その姿は地球でいうとゴリラに近いかな？
ザウルス族同様、服とかは着用せず、その拳だけで魔物たちと戦う部族。でも、毛の色がゴリラと全然違う。身体全体が薄い茶色の剛毛に覆われていて、特徴的なのが顔だ。眉毛だけが長く、緩い曲線を描きながら頭の方へ伸びている者、口髭が地面の方へ伸びている者、あご髭が胸付近まで伸びている者、三者三様だった。
「早く後ろに行って!!　そのまま行けば、僕たちの仲間がいるから回復してもらって。ここは僕たちに任せるんだ!!」
「しかし、お前たちが……」
「やつがここに戻ってきた時点で一緒だよ。大丈夫、今回こっちには切り札があるから安心して」
「すまん、頼む」
ネーベリックという脅威が後方から迫ってきている以上、彼らに悩む時間などなかった。獣猿族の三人は、すぐ私たちから離れていく。そして地響きが大きくなっていき、やつが現れた。